

## 1 黒とう病

### A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は巻きづるやり病枝で越冬し、展葉初期から感染を始める。
- 2 伝染源の除去と初期防除に重点をおく。

### B 耕種的防除法等

- 1 巻きづる及びり病枝を除去する（休眠期ならびに5から6月）。
- 2 新梢がおそ伸びしないよう施肥、せん定に考慮する。

### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

使用時期	農薬系統・一般名	FRACコード
4月 (開花前)	有機硫黄剤	M3
	ジチアノン剤	M9
5月中旬～下旬 (開花期～落弁期)	ベンゾイミダゾール系	1
	チオファネート系	1
	ジカルボキシイミド系	2
	DMI剤	3
	QoI剤	11
	フルアジナム剤	29
	グアニジン類・抗生物質混合剤	M7・19

## 2 晩腐病

### A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は結果母枝や巻きひげ等で菌糸の形で越冬し、落弁期頃から感染を始める。
- 2 伝染源の除去と初期防除に重点をおく。

### B 耕種的防除法等

- 1 園内の排水ならびに通風採光を図り、加湿にならないよう注意する。
- 2 本病の発生が多いほ場では、袋かけを早めに行う。また、袋かけは果房が濡れた状態では行わない。
- 3 雨水が袋内にしみこまないよう袋は丁寧にかける。

### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

袋掛け前の防除は、果実への薬害防止のため、動力噴霧器の圧力を下げ、小豆大期までに行う。

使用時期	農薬系統・一般名	FRACコード
6月上旬～中旬 (落弁期～袋掛け前)	QoI剤	11
	フタルイミド類	M4
	CAA殺菌・有機硫黄系混合剤	40・M3
袋掛け後	アニリノピリミジン系・フェニルピロール類混合剤	9・12
	銅剤	M1

### 3 うどんこ病

#### A 生態と防除のねらい

- 1 葉の他に花穂や房軸・果実に発生する。
- 2 高温多湿の条件下で多発し、6月下旬から7月上旬に発病する。
- 3 わずかな病斑があると袋内でも伝染を繰り返す。

#### B 耕種的防除法等

園の通風採光を図り、被害果房は早めに除去する。

#### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

6月上旬から中旬にかけて袋掛け前の防除を徹底する。

使用時期	農薬系統・一般名	FRACコード
6月上～中旬	Q o I 剤	1 1
(落弁後～袋掛け前)	D M I 剤	3

### 4 べと病

#### A 生態と防除のねらい

- 1 展葉初期～梅雨期および秋期に低温で雨が多い年に発病が多い。
- 2 5月から6月頃に発病葉から発生した卵胞子が発生源となり、気孔感染する。

#### B 耕種的防除法等

- 1 り病組織内で越冬するため落葉を園外に処分する。
- 2 枝のおそ伸びや、軟弱徒長にならないよう肥培管理に注意する。

#### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

- 1 発病後の防除は難しいので予防散布に努める。
- 2 耐性菌発生のおそれがあるので同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。Q o I 剤 (FRACコード: 1 1) は、他県において耐性菌の発生が確認されており、本県においても感受性低下の恐れがあるため、単剤の使用は年1回まで (その他成分との混用もしくは混合剤は1年2回まで) とする。
- 3 袋かけ前の防除は果実への薬害防止のため小豆大期までに散布する。なお、散布時期が遅れると果粒を汚染しやすい。
- 4 果実への薬害防止のため、動力噴霧器の圧力を下げる。
- 5 銅剤と他の剤との散布間隔は、アリエッティ水和剤は14日、その他は7日以上あける。

使用時期	農薬系統・一般名	FRACコード
開花前	ジチアノン剤	M 9
	有機硫黄剤	M 3
開花期 ～袋掛け前	Q o I 剤	1 1
	アメトクトラジン・カルボン酸アミド類混合剤	4 5・4 0
	ベンズアミド類・カルボン酸アミド類混合剤	4 3・4 0
	C A A 殺菌・有機硫黄系混合剤	4 0・M 3
梅雨期～収穫期 袋掛け後	銅剤	M 1
	有機リン系剤	3 3
	シモキサニル・Q o I 混合剤	2 7・1 1
	シアゾファミド剤	2 1
収穫後	有機硫黄・アミド系殺菌混合剤	M 3・4

## 5 褐斑病

### A 生態と防除のねらい

樹勢の維持を図り、初期防除に重点をおく。

### B 耕種的防除法等

- 1 落葉・巻きづるを処分し、園の排水を図り、梅雨期の通風採光に努める。
- 2 結果過多にならないよう結果量を調整する。

### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

- 1 袋掛け前の防除は、果実への葉害防止のため、小豆大期までに行う。
- 2 耐性菌発生のおそれがあるので同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。Q o I 剤 (FRACコード: 1 1) は、他県において耐性菌の発生が確認されており、本県においても感受性低下の恐れがあるため、単剤の使用は年1回まで (その他成分との混用もしくは混合剤は1年2回まで) とする。

使用時期	農薬系統・一般名	FRACコード
6月上～7月中旬	Q o I 剤	1 1
(落弁期～梅雨期)	D M I 剤	3
	ベンゾイミダゾール系	1

## 6 灰色かび病

### A 生態と防除のねらい

開花期前後に梅雨が続く年に発病が多い。薬剤散布だけでなく耕種的防除に努める。

### B 耕種的防除法等

- 1 園内の通風採光を図り、過湿にならないように注意する。特に施設栽培では、開花期前後は換気を図って乾燥状態に保つ。
- 2 落弁後の花かすやり病花・花(果)房は取り除く。

### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

- 1 花房ならびに花柄部を主体に散布する。
- 2 耐性菌発生のおそれがあるので同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

使用時期	農薬系統・一般名	FRACコード
5月中～6月上旬	ジカルボキシイミド系	2
(開花～落弁期)	S D H I 剤	7
	アニリノピリミジン系・フェニルピロール類混合剤	9・1 2
	Q o I 剤	1 1
	アミド系	1 7
	抗生物質	1 9
	フルアジナム剤	2 9
	フタルイミド類	M 4

## 7 枝膨病

### A 生態と防除のねらい

- 1 本病は、結果母枝や巻ひげなどで越冬し、病斑上に形成された柄胞子が雨水によって媒介される。
- 2 欧州系の品種や巨峰群品種はり病性である。

### B 耕種的防除法等

- 1 雨よけなどの被覆栽培を行う。
- 2 り病苗を持ち込まないようにする。
- 3 通風採光をはかり、園内の過湿を避ける。
- 4 り病枝、枯死枝、巻ひげはせん定時に除去し、ほ場外で処分する。

### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

使用時期	農薬系統・一般名	FRACコード
4月中旬以降	QoI剤	11
	フルアジナム剤	29
	銅剤	M1
	ジアチノン剤	9

## 8 白紋羽病

### A 生態と防除のねらい

本病は、地下部に発生し、樹勢低下として症状が現れる。

### B 耕種的防除法等

- 1 り病苗を持ち込まないようにする。
- 2 発病して枯死した根やせん定枝は、園内に放置すると伝染源となるので、園外に処分する。

### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

発病が疑われる場合は株元を掘り上げ、早期発見、早期防除に努める。感染樹は、病根を除去した後に薬剤処理をする。

使用時期	農薬系統・一般名	FRACコード
収穫後	フルアジナム剤	29

## 9 チャノキイロアザミウマ

### A 生態と防除のねらい

- 1 本種は多食性で多くの果樹を加害する。加害部位は、葉、茎、果実である。
- 2 ブドウ果房の被害は、幼果期に加害されるとその部位がコルク状となる症状や、穂軸の褐変が一般的である。緑色系品種では、収穫期の果実も加害され、果粒表面に褐色の斑点やシミ状の褐変が発生し、品質低下につながるため、収穫直前まで防除が必要となる。

### B 耕種的防除法等

園周辺の寄生植物チャ、マサキ、サザンカ、ツバキは、発生源となるため、ほ場周辺にある場合はできるだけ除去する。

### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

幼果期の防除では効果が低いため、落花後約1ヶ月間に重点的に防除する。

使用時期	農薬系統・一般名	I R A Cコード
落花期～袋かけ期	ピレスロイド系	3 A
袋かけ後	ネオニコチノイド系	4 A

## 10 ヒメヨコバイ類（フタテンヒメヨコバイ等）

### A 生態と防除のねらい

ブドウには数種のヒメヨコバイ類が寄生する。ほとんどの種が年3回の発生である。

### B 耕種的防除法等

下草の雑草で発生するヒメヨコバイ類もいるため、除草を徹底する。

### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

5月下旬から7月までの第1世代幼虫発生期に重点的に防除する。

使用時期	農薬系統・一般名	I R A Cコード
5月下旬～7月	ピレスロイド系	3 A

## 1.1 ブドウスカシバ

### A 生態と防除のねらい

老熟幼虫が枝内で越冬する。

### B 耕種的防除法等

- 1 休眠前に被害枝を園外に処分する。
- 2 食入した幼虫は見つけしだい捕殺する。

### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

5月下旬から6月下旬の産卵期の防除を徹底する。

使用時期	農薬系統・一般名	I R A Cコード
5月下旬～6月下旬	ジアミド系	2 8

## 1.2 ブドウトラカミキリ

### A 生態と防除のねらい

幼虫が結果母枝の樹皮下で越冬する。

### B 耕種的防除法等

- 1 せん定時、幼虫が食入している部分は（芽の付近、樹皮が黒ずんでいる）表皮を削り捕殺する。
- 2 せん定枝は発生源となるため園外に処分する。

### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

収穫後から10月上中旬の秋期防除に重点をおく。

使用時期	農薬系統・一般名	I R A Cコード
収穫後（成虫発生期：8月中旬～9月）	有機リン系	1 B
幼虫食入期（10月上中旬）	ネオニコチノイド系	4 A
落葉後～萌芽前	有機リン系	1 B

### 13 コガネムシ類

#### A 生態と防除のねらい

- 1 ブドウには数種のコガネムシ類が寄生する。マメコガネは5月から7月、ドウガネブイブイは6月から8月、ヒメコガネは6月から9月、アオドウガネは7月から9月に発生しそれぞれ葉を中心に加害する。
- 2 特定樹に集中する傾向があるので発生初期に注意し早期に防除を行う。

#### B 耕種的防除法等

加害樹に限られているときは、早期に捕殺する。

#### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

使用時期	農薬系統・一般名	IRACコード
5月～9月	ピレスロイド系	3A

### 14 ハスモンヨトウ

#### A 生態と防除のねらい

- 1 本種は雑食性で多くの野菜・花卉等を加害し、近年、ブドウ、カキ、カンキツ類等への加害が目立つ。
- 2 8月から10月頃に多発し、幼虫が葉や果実表面を食害する。
- 3 被害発生初期には、葉裏に産卵された卵塊から多数の孵化幼虫が発生し、葉がスカシ状に食害される。

#### B 耕種的防除法等

被害葉は見つけ次第、付着している卵塊や若齢幼虫ごと処分する。

#### C 薬剤防除のポイント・注意事項等

使用時期	農薬系統・一般名	IRACコード
8月～10月	ジアミド系	28